

道が語る日本古代史

近江俊秀著

奈良盆地の南西、葛城氏という大豪族の勢力圏と思われるあたりから古墳時代の立派な道路が出土した。金剛山のふもとを通る道路は、紀水門（紀ノ川河口の古代の湊）につながり、葛城氏にとって重要な、鉄をはじめとした交易品を運ぶ道だったのではないかと著者は推測する。律令国家が敷設する以前の道だ。そ

れがあったゆえに葛城氏は、奈良盆地の南東に勢力を築いた天皇家と対立しうるほどの力を持ちえたのである。

近年、古代の道路遺跡がいくつも見つかり、その実態が明らかになりつつある。大和と河内には、驚くほど「精巧で、高い計画性を持った道路網」があった。谷は埋め、山は削ってでも一直線に道路を

延ばしてゆく。また、推古天皇の時代、壬申じんしんの乱のあとの天武天皇の時代など、時代の転換期には道路の姿も大きく変化するという。人や物を移動させるのが道なのだから、それは当然と言うべきか。

それにしても、九州自動車道・長崎自動車道と古代の西海道とが、そのルートばかりか、インターチェンジと駅の場所までがほぼ一致するという事実には驚かされた。（朝日新聞出版、1400円）